

マクロ経済学の批判的展望 - 「飛翔せる鷲」*(=経済学史家)の視座から

上智大学 平井俊顕

以下のような順で話を進めるようにしたい。

1. 最初に、この30年間のマクロ経済学の動向を概観する。「新古典派総合」の崩壊は1970年代に生じた。その後の30年間は(戦前とは異なる)新たな次元での多極化(そして経済理論・社会哲学の両面での多極化)の時代である点が注目に値する。

2. この概観に続いて、現在およびこれからのマクロ経済学を考えるうえで重要と思われる点を、問題点として取り出していくことにする。

3. 最初に「新しい古典派」を対象に批判的検討を加える。ここでは次の4点に注目してみたい：(a) 代表的家計の想定、(b) 合理的期待形成の採用、(c) 功利主義、(d) 「フォーマリズム」である。

4. 次にケインズ派を対象に批判的検討を加える。ケインズ派は一枚岩ではなく、非常に内部対立の深刻な学派である。

ケインズ派との関連でいくつかの問題提起をしてみたい。

(i) 1940年代にケインズが行った理論的・政策的状況を冷静にとらえる必要性。『戦費調達論』、ミードとの協同、『雇用政策白書』にみられる分析手法を真摯にみつめる必要。

(ii) 『一般理論』をどう理解するのか(純粋にテキストとして、また原ケインズとしてとらえた場合) - 2つの対照性を有するものとしてとらえるべきであり、「不確実性」のみを強調するのは一方的である。

(iii) 『一般理論』のどの要素を重要とみるのか。

これは現在の経済分析にとって何が有効な分析道具たりうるのか、あるいは大きな視点からの経済把握にとってどこに現在の価値があるのか、という問題である。理論的・思想的に今日との関連でとらえるとき、このようなアプローチは当然のものとなる。

(iv) 「新古典派総合」をどう評価するのか --- IS-LM理論, 政策のファイン・チューニングなどをめぐって。

(v) ポスト・ケインズ派、不均衡理論ケインズ派、ニュー・ケインズ派についてのコメント

5. 学史的論点 --- 新古典派とは何か、「ケンブリッジ学派」の理論・思想とは何か、「正統派の新古典派」とは何か。これらをめぐって学史的な洞察・理解が今日の経済学を理解するうえでも不可欠である。

6. むすび --- 最後にケインズ、もしくはケインズ的思考の現代的意義について述べることにする。

* 編著『市場社会とは何か』(SUP 上智大学出版、2007年5月)の「帯」で意識的に用いた言葉。